

第 219 回 大隈講堂の大隈重信像と泉岳寺の大石内蔵助像と澤木興道像

筆者：林 久治（記載：2023 年 1 月 31 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張っただけで人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」という意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要な不可欠である。昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の 3 人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は 9 月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってから、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

1 月 21 日に、私は早大戸山キャンパスの大隈重信像と当地の前にある放生寺の役行者像を探索し、[前回の記事/f](#) に記載した。その時、大隈講堂にある有名な大隈像も [1\) のサイト/](#) に収録されていないことに気付いた。本像は一般の立入難い場所にあるから収録されていなかったのであろう。そこで、1 月 28 日に本像を探索した次第である。また、泉岳寺まで足を延ばして、大石像と澤木像も探索した。両像は [1\) のサイト/](#) に収録されているが、それらの基本情報が記載されていないので、今回探索した。本稿は、以上 3 像の探索記で、私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

（2）早稲田大学大隈講堂の大隈重信像

次ページの図 1 上に早稲田大学大隈講堂のアクセス地図 ([3\) のサイト/1](#) より借用) を示す。「**四つの大隈銅像と政治家大隈重信**」と題する優れた記事 ([4\) のサイト/f](#)) がある。本記事に記載されている 4 像の表を図 1 下に示す。本記事に書かれた 4 像の解説を要約すると、次のようになる。

①戦前に 4 像が作られたが、現存しているのは 3 像である。

②初代（表の 1）は大礼服像で、東京専門学校開校 25 周年と、大隈の古希を記念して、1907 年に大学中央広場（当時）に設置された。銅像自体は 1903 年 1 月に完成している。本像に対して、「権威や権力ではなく、『民衆政治家』大隈重信こそ記念されるべきであり、その銅像も勲一等伯爵を象徴する大礼服ではなく、『大平民』としての大隈をイメージさせるものでなければならない」との批判は根強く存在した。

③ 2代（表の2）は衣冠束帯像で、芝公園に設置されていたが、現存しない。

④ 初代像設置から25年後の1932年に3代像（表の3：平服像）が制作され、大学中央広場（現在は正門奥）に設置された。初代像はキャンパスから姿を消し、大隈講堂の北側回廊に移設され現在に至る。

⑤ 4代（表の4）はフロックコート像で、国会議事堂に設置されている。



表①

	デザイン	設置	制作者	設置場所	現在の状態	発起人	備考
1	大礼服	1907年	小倉惣次郎 (鑄造鈴木長吉)	早稲田大学 中央大広場	大隈講堂北 側回廊	市島謙吉・坂本 三郎・塩沢昌 貞・増田義一等	銅像の完成は 1903年1月
2	衣冠束帯	1916年	朝倉文夫	芝公園(16 号地)	現存せず	侯爵大隈重信君 寿像建設委員会	
3	平服(ガウ ン・角帽)	1932年	朝倉文夫	早稲田大学 中央広場	早稲田大学 早稲田キャン パス内		
4	フロック コート	1938年	朝倉文夫	国会議事堂	国会議事堂		
5	大礼服(石 膏塑像)	1901年	小倉惣次郎		早稲田大学 大隈記念室		初代大隈銅像 の原型塑像
6	大礼服	1986年			佐賀市大隈 記念館		初代大隈銅像 の複製

図1. 上：早稲田大学大隈講堂のアクセス地図、本図は、[3\)のサイト/1](#)より借用。(赤い矢印は、本像を撮影した方向。) 下：四つの大隈銅像の表、本表は、[4\)のサイト/f](#)より借用。

上記の大隈像の内、3代像と4代像は大変有名で、[1\) のサイト/](#)には勿論収録されている。一方、初代像は早大のパンフレット等によく掲載されており、結構有名であるが、[1\) のサイト/](#)や某有名銅像サイト ([5\) のサイト/1](#)) にも収録されていない。それは大隈講堂内への立入が極めて困難であるのが、理由のようだ。その辺の事情を、[6\) のサイト/2](#) が次のように説明している。

早稲田大学は、東京都新宿区戸塚町1丁目104に本部を置く日本の私立大学である。1882年（明治15年）に大隈重信が創立した東京専門学校が前身で、1902年（明治35年）に早稲田大学と改称、その後、1920年（大正9年）に大学令に基づく大学となった。大隈講堂[国指定重要文化財]の正式名称は「早稲田大学大隈記念講堂」。佐藤功一、内藤多仲、佐藤武夫の設計で、1927年に竣工した。早稲田大学ではキャンパスツアーを実施しており、事前に予約して参加することができます。在学生でも、このツアーなどに参加しなければ、大隈講堂の内部は見られないとのこと。

また、[7\) のサイト/1](#) には、次のような記載があった。

本像は大隈講堂内北側廊下にあります。北側廊下は立ち入りできませんが、大隈講堂左側の通路から垣間見ることが出来ます。

そこで、私は大隈庭園に行って、そこから大隈講堂内北側廊下を垣間見ようを試みた。1月28日に、私は地下鉄東西線の早稲田駅から早大正門に行った（道順は、[図1上](#)を参照）。[図2](#)に、正門付近から見た大隈講堂正面の写真を示す。玄関は固く閉じられていた。（本文は5ページに続く。）



図2. 早大大隈講堂の正面



図3. 上：大隅庭園から見た大隈講堂北側回廊（見た方向：図1上の矢印）、下左：望遠撮影した大隈重信像、下右：[6）のサイト/2](#)に掲載された大隅像。

私は大隅庭園に入り、大隈講堂北側回廊を見た。すると、回廊中央に立像が見えた。その写真を図3上に示す。本像の望遠撮影写真を図3下左に示す。私は銅像探索のカメラは安物を利用しているので、この程度の解像度しか得られなかった。参考のために、図3下右に、[6\)のサイト/2](#)に掲載された大隅像を示す。

[4\)のサイト/f](#)には、「**本像の制作者は小倉惣次郎、鑄造は鈴木長吉**」との記載がある。8)のサイトによれば、小倉惣次郎の略歴は次の通りである。

[生]天保14(1843)：千葉、[没]1913.5.24：東京。彫刻家。千葉県の農家の生れ。工部美術学校でV.ラギーザについて洋風彫刻を学び、明治の洋風彫刻の先駆者となる。また日本最初の大理石彫刻家として知られる。のちに後進の指導にあたり、その門から新海竹太郎、北村四海などのすぐれた作家が育った。主要作品「福島中佐像」「大隈重信像」「明治天皇像」など。

ウィキペディアによれば、鈴木長吉の略歴は次の通りである。

鈴木長吉(1848年9月12日 - 1919年1月29日)は、武蔵国入間郡石井村(現在の埼玉県坂戸市)で生まれた。比企郡松山の岡野東流齋に蠟型鑄金を5年間学び、18歳で独立、江戸で開業した。1874年に殖産興業の一環として日本の工芸品を西洋へ輸出する目的に設立された「起立工商会社」の鑄造部監督、2年後には工長となり、退社する1882年までの間、次々と大作を手掛けて内外の博覧会へ出品、高い評価を得た。工業が未熟な明治初期の日本にとっては精巧な工芸品は貴重な外貨獲得手段であり、工芸品の輸出目的で設立された数々の企業は、廃刀令や廃仏毀釈の影響で仕事を失いつつあった当時の金工家にとっては貴重な生計手段であった。西洋事情を良く知る林忠正の監修の下で西洋人好みに制作した「十二の鷹」(東京国立近代美術館蔵、2019年度に重要文化財に指定)は、1893年に開催されたシカゴ万国博覧会に出品された全作品の中で最も高い評価を得た作品の一つとなった。また同博覧会に出品された「驚置物」(東京国立博物館蔵)は2001年に重要文化財に指定されている。1896年にはその高い技量が認められ、鑄金家として帝室技芸員となった。

以上の資料などにより、大隈像の概要は次の通りである。

大隈重信立像(新宿区/早大)

設置場所：東京都新宿区戸塚町1-104 大隈講堂北側回廊

制作者：小倉惣次郎(1843-1913)

鑄造：鈴木長吉(1848-1919)

設置時期：1907年、早大中央広場に設置

移設時期：1932年、現在の位置に移設

設置経緯：戦前、4像の大隈重信立像が制作されたが、現存しているのは3像である。初代像(本像)は大礼服姿で、東京専門学校開校25周年と、大隈の古希を記念して、1907年に大学中央広場(当時)に設置された。銅像自体は1903年1月に完成している。本像に対して、「権威や権力ではなく、『民衆政治家』大隈重信こそ記念されるべきであり、その銅像も勲一等伯爵を象徴する大礼服ではなく、『大平民』としての大隈をイメージさせるものでなければならない」との批判は根強く存在した。初代像(本像)設置から25年後の1932年に3代像(現在の平服姿)が制作され、大学正門奥に設置された。初代像はキャンパスから姿を消し、大隈講堂の北側回廊に移設され現在に至る。なお、2代像は現存せず、4代像は国会議事堂に設置されている。

(3) 泉岳寺の大石内蔵助像と澤木興道像

早大で大隅像を探索した後、時間があつたので泉岳寺に行って大石内蔵助像と澤木興道像を探索した。両像は[1\) のサイト/](#)に収録されているが、それらの基本情報が記載されていないので、今回探索した次第である。図4上に、泉岳寺の周辺地図を示す。図4下には、泉岳寺山門とその前(図4上の①地点)に設置された大石像を示す。



図4. 上：泉岳寺の周辺地図、本図は、[9\) のサイト/E](#)より借用。①：大石像、②：澤木像。下：泉岳寺山門と大石像。



図5. 左：泉岳寺山門前に設置された大石像、右：大石像の説明板。

図5左に泉岳寺山門前に設置された大石像を、図5右に大石像の説明板を示す。本像の周囲には、これ以上の情報は全く無かった。従って、本像の制作者は不明である。以上の資料などにより、大石像の概要は次の通りである。

大石内蔵助立像（港区）

設置場所：東京都港区高輪 2-11-1 泉岳寺山門前

制作者：不明

除幕：1921年12月14日

設置経緯：本像横の案内板には次のような記載がある。

大石内蔵助良雄銅像

この銅像は、浪曲の宗家・桃中軒雲右衛門の発願により鑄造されたもので、所有者が転々としていましたが、泉岳寺に寄進され、大正十年十二月十四日に除幕したものです。

内蔵助が、当時の風俗である元禄羽織を身につけ、連判状を手にして東の空（江戸方向）をじっとにらんでいる姿を表したものです。

なお、[10\) のサイト](#)によれば、桃中軒雲右衛門の略歴は次の通りである。

桃中軒雲右衛門（1873—1916）は浪曲師。本名岡本峰吉。上州祭文（さいもん）の黒繁（くろしげ）こと吉川繁吉の次男として群馬県に生まれる。小繁と名のり東京・浅草の掛け小屋で人気をとったが、父の死後、名跡を継いで浪花節へ転向した。1898年、市川梅車（ばいしゃ）一座に客演中、梅車の妻でお浜という三味線の名手と駆け落ちして関西へ去る。その後九州まで放浪し、孫文とも親交のあった壮士宮崎滔天（とうてん）らと知り合い、その後援を得て、忠臣蔵を題材に台本を整備し、伴奏も関西風な水調子に九州系の琵琶（びわ）の手を加味して芸風を一新、名も桃中軒雲右衛門と変え、ついに九州で第一人者となった。1907年3月の関西公演で成功、その勢いによって同年6月、東京・本郷座で「武士道鼓吹」の看板の下に、27日間『義士銘々伝（めいめいでん）』を口演し続けて大成功を収めた。テーブル掛けで覆った机の前に立って口演するというこのときの演出方法は、その後の浪曲界の興行形態に大きな影響を与えた。歌舞伎座にも出演、浪曲の社会的地位をたかめ、浪曲中興の祖とされる。1913年相三味線でもあったお浜が肺結核で没したあと、雲右衛門も急速に衰えをみせて、以後新作を発表することなく、1916年11月7日、同じ病で没した。

本堂の前（図4上の②地点）には、澤木興道座像が設置されていた。その写真を図6左に示す。本像の土台には制作者のサインがあった。その写真を図6右に示す。それには「恒夫 謹作」とあった。



図6. 左：澤木興道座像、右：本像土台に刻まれた制作者のサイン。



図 7.
 上：「澤木興道老師像」と題する案内板、
 下：本像側面にある「坐禅像造立趣旨」と題する碑文。



本像の横には、「澤木興道老師像」と題する案内板があった。その写真を図 7 上に示す。本像の台座正面には「行佛威儀」の題字があった。本像を制作した翠雲堂の記事 (11) の[サイト/](#)には以下の記載がある。

泉岳寺本堂前の澤木興道老師像は彫刻家鏡恒夫先生が原形を作り、翠雲堂が鑄造、納めたもので、時代を代表する頂相像としてお詣りの方々を見守ります。

原型制作者の鏡恒夫氏のネット記事は少ない。彼は翠雲堂で仏像（及び僧像）を多数制作しているようだ。[13\) のサイト/m](#)には、以下の記載がある。

鏡恒夫：松戸市の彫刻家・仏師。主な作品：久留米慈母大観音（福岡県）、玄武山普濟寺本尊聖観世音菩薩坐像

また、[14\) のサイト/1](#)には彼の生年（1935）の記載がある。

本像側面には「**座禅像造立趣旨**」と題する碑文がある。その写真を図7下に示す。本像の施主である石井市三郎氏のネット記事はなく、彼の経歴は不明である。

なお、澤木老師の経歴や本像の解説は、[14\) のサイト/1](#)が優れている。以上の資料などにより、澤木像の概要は次の通りである。

澤木興道座像

設置場所：東京都港区高輪 2-11-1 泉岳寺本堂前

原型制作：鏡恒夫（1935—）

鑄造：浅草翠雲堂

寄贈者：石井市三郎

設置時期：1989年3月

設置経緯：澤木興道老師（1880-1965）は津市の生まれ。仏法の究極である座禅をもって生涯を貫いた二十世紀にもっとも活躍した禅僧の一人です。「座禅像造立趣旨」には以下のように記載されている。

早年東都に出て商いの道を修行し郷里宇都宮市に洋品店を創業した私は昭和十八年第二次大戦中組合の勤労奉仕に加わり間もなく肺浸潤を患い続いて胃潰瘍心不全を併発して生業と闘病のはざまに長い間苦悩していた。しかし五十三歳の時、長男の大学卒業を機に家業の一切を託して引退し養病に専心することを決意した。

昭和三十六年偶々桂林寺における知己の法要に列し善知識当寺住職広瀬大道方丈に邂逅して参禅の道を教えられ当寺の参禅会に参加して碩徳澤木興道老師の聲咳に接し従来味い得なかった感激を覚え、茲に始めて正伝の座禅を親しく行ずる棧縁に恵まれた。澤木老師亡き後は、酒井得元老師に聞法する勝縁を得て己に二十余年、従来の自己中心の考えと生き方を一新して虚弱な身ながら八十三歳の今日まで日々是れ好日の心で感謝の毎日を過ごしている。是れ偏に宗祖道元禅師の只管打坐の教えを奉じて朝夕座禅に親しみ、日々奉仕の生活に導かれて来たお陰を信じ、何事にも自己の身勝手な期待を捨て自身の全てを佛にお任せして専一に座佛を行ずることが安楽の法門であり生命の安らぎ生活の憩いであると心に銘じている。

私の病の根源であったエゴによる迷いを知らしめ私の心を他の一切に向わしめた正信の座禅をより多くの人々に勧めたい思うこの切なる念願黙し難く、桂林寺に次いで私が嘗て商いの修業に勤しんだ東京の地に結縁を得て此處泉岳寺の浄域に正身端座の座禅像を奉納する次第である。

維時平成元年三月春彼岸會 施主 石井市三郎 合掌

なお、[15\) のサイト/1](#)によれば、「**只管打坐**」の意味は次の通りである。

道元の坐禅は、「**只管打坐（しかんたざ）**」であります。「ただ ひたすらに坐る」という意味です。「それに成りきること」であり、坐禅は、坐ることに成りきることであります。体と心が一つになるということです。背筋を伸ばし体が真っ直ぐになれば、心が真っ直ぐになる。心が真っ直ぐになれば、思うことが真っ直ぐになる。「形は心をつくる」ということです。

参考資料

- 1) のサイト : <https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト : <http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト : <http://www.color-science.jp/zenkoku2013/kaijouannai.html>
- 4) のサイト : [WasedaDaigakushiKiyo_47_Hiwa.pdf](#)
- 5) のサイト : <http://takay36.blog.jp/archives/3913887.html>
- 6) のサイト :
https://blog.goo.ne.jp/zipangu_travel/e/423a0d90d8af26f00d9f93ac36212fc2
- 7) のサイト : <https://rekigun.net/original/travel/statue/statue-07.html>
- 8) のサイト : [小倉惣次郎\(おぐらそうじろう\)とは？ 意味や使い方 - コトバンク \(kotobank.jp\)](#)
- 9) のサイト : <https://mapfan.com/spots/SCQ54,J,VBE>
- 10) のサイト : [桃中軒雲右衛門\(とうちゅうけんくもえもん\)とは？ 意味や使い方 - コトバンク \(kotobank.jp\)](#)
- 11) のサイト : <https://suiundo.co.jp/trust/542/>
- 12) のサイト : <http://masuda901.web.fc2.com/page07tax13f.html>
- 13) のサイト : <http://www.daibutu.jp/artist.htm>
- 14) のサイト : <http://masuda901.web.fc2.com/page07tax13f.html>
- 15) のサイト : <https://www.daiouji.or.jp/houwa047.html>